

訪米阻止を「決戦」に

各全学連が大会を開く

全国全共闘結成の動きも

全学連各派は今日由旬をきり、ついに定例の各学連大会を開催した。

とくに今回は七〇年安保闘争、とりわけ十一月以降訪米阻止闘争を控えており、この闘争を、十一月決戦、と位置付けているのが注目されている。

各派とも一・一八、一九東大闘争、四・二八沖繩闘争、六・八・九ASPAO闘争などで多数の学生が逮捕されているにもかかわらず、早大には前週より運動の盛況を示した。しかし、上層部の過激者が多いため、真面目には落ちているとの見方も出ている。

大会の模様は、本紙にて回覧してのほかに、本紙が中心となつた。

また、秋までに、五マル派を隊

る「どの方針を打ち出している。なお、委員長が成瀬謙治君から大野健男君(早大)に交代した。また、副委員長に加藤邦男・坂本良の両君、書記長には橋本正彦君が選出された。

【中核全学連】 十五日から十七日まで豊島公会堂。十八日には本学和泉校舎六号教室でそれぞれ大会を開いた。理事、金山克己(総長)・横田大(は拘留中)である。同全学連は七〇年に向けて「七〇年闘争は日本における階級闘争の決定的要約点をなすもので、七〇年の大激突をして日本帝國主義の革命的打倒、プロレタリア独裁國家樹立の突破口とするために政治的・組織的力集のすべてを賭けて戦ふ」という方針を打ち出した。

【早大全学連】 早大・大隈講堂で十三日から十六日までの四日間行なわれた。五マル派は他のセクトとの対立が激しく、根拠地の早大では連日内ゲバが繰り返され、全学連大会の間中も早大全共闘の間で激しい打ち合いが展開された。七〇年に向けては「下からの善美な大衆闘争の組織化、物質化を断固として追求し、深まりゆく内共・反日共闘争の勝敗をのりこめて七〇年闘争の左翼的革命表現の闘いを断固として追求す

【反帝学連全学連】 十五、十六の両日、川崎労働会館で開催された。七〇年に向けては「七〇年安保闘争は日本の政治社会秩序の帝國主義的再編に向かい対決し、國家とプロレタリア革命の全面的衝突を押し上げる闘いとして展開されるべきもの」としている。

【社学同全学連】 十四日から中人講堂で開催される予定であったが、十一日決戦を主張する内ゲバ派とちがいはない。内ゲバ派との間の対立が既報の通り内ゲバにまで発展し、大会は延期された。この内

ゲバの舞台となった本学和泉校舎は十六日焼燬を受けた。委員長は藤本敏雄君(同志社大)。なお同派は二十三日、本校記念館で政治集会を開く予定である。

【民書系全学連】 八月二十八日の三日間行なわれる予定である。会場その他、詳細は未定。委員長は田原和真君(東洋大)。

【その他の学生組織】 解放戦線——同派は全国をいくつかのブロックに分け、理論合宿を行なった。中でも都府放戦線は十四日から十八日まで五日市市の戸倉荘で合宿を開いた。

【講義系】 プロ学同、フロントの両派は十五、十六の両日、法大で安保紛争全国学生共闘会議(略称、安保全学共)を結成した。なお、フロントは二十二日午後六時から全産連会館で政治集会を開く。